

ARCS 動機づけモデルを生かした小学校授業のデザイン

- 自信の要素に着目して -

学籍番号 (159976)

氏 名 (篠原 幸太)

主指導教員 (寺嶋 浩介)

1. 目的

今日、学力をつけると共に、児童生徒の十分な「意欲」や「自信」を引き出すことが、我が国の学校教育に求められている。例えば、「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」(内閣府 2013)によると、国際的に見て日本の若者は「意欲」や「自己肯定感」が低いという現状がある。

そこで、本報告書では、筆者が教職大学院の実習で行った小学校での授業実践において、ARCS 動機づけモデルを活用して、「自信」(Confidence)を向上させる授業をデザイン、実践し、その効果を検証することを目的とする。

2. ARCS 動機づけモデルについて

学習意欲を高める研究のひとつにケラーの ARCS 動機づけモデルがある(Keller 2010)。ARCS 動機づけモデルとは、授業・教材を魅力的なものにするために学習意欲を「Attention(注意)」「Relevance(関連性)」「Confidence(自信)」「Satisfaction(満足感)」の4つの要因でとらえるモデルである。

これらの側面から、授業における学習者の分析を行い、学習意欲を高めるための方策の検討することで、授業を魅力的にすることができ、学習者の「勉強しよう」という動機づけも高めることができる。ARCS 動機づけモデルでは、学習意欲の問題と対応策を整理し、各要因に対応した動機づけ方略、ならびに動機づけの手法が提案されている。

3. 方法

本報告書では、まず ARCS 動機づけモデルを活用し、学習意欲を向上させる授業の実践、検証を行い(第2章)、そこでの反省点に基づいて、自信に焦点化した授業実践をおこなった後(第3章)、更に、それを改善、発展させた授業実践を行った(第4章)。

本報告書では、目的に沿って、以下の①～③の手続きを取り、改善しながら実践した。

- ① 対象とする児童の自信について、事前アンケートと担任教師への聞き取り調査によって診断的評価を行う。
- ② クラス全体と、抽出児に対して、①で得た児童の課題に対する対応策を明確にし、授業をデザイン、実施する。
- ③ ②の授業実践を行うことで、①で得た児童の実態がどのように変容したのかを検証する。

自信を計測する尺度としては、ARCS モデルに基づくヒント集(鈴木, 1995)の自信要因における下位項目を参考に、アンケートを作成し、回答を得点化した後、実践前後で比較をした。加えて、アンケートの結果を基に、児童へのインタビューや、自由記述の収集を行い、対応策の有効性を検証した。

4. 主な成果と課題

第2章では、試験的に ARCS 動機づけモデルを活用し、授業実践を行った。児童の学習意欲面での課題に対し、ARCS 動機づけモデルを活用した対応策を組み込むことで、全ての項目において、意欲が向上した。特に、対応策と対応する項目について大きく点数を向上させることができた。ただし、児童の実態に対して、対応策の量が過多になるという課題が残った。

その課題を踏まえ、第3章では、対応策を「自信」の要素に焦点化した。第3章では、ARCS 動機づけモデルを活用し、児童の抱える自信に関する課題に対して、適切な対応策を組み込んだ授業デザインを行うことで、児童の学習に関する自信を向上させることができた。一方で、対応策デザインが不十分であった「失敗の許される練習を用意すること」についての項目と「成功を努力の成果と実感させること」についての項目は、自信を向上させることができなかった。今後は、児童の間違いを、良い例として取り上げ、クラス全体で考える機会を設けることで、失敗の許される雰囲気を作る必要がある点と、授業の中で振り返りの機会を設けることで、児童が成功を努力に帰属できるように改善を行う必要がある点が課題となった。また、自信の個人差に対応しようとする個々の対応策を用意せねばならず、対応策の準備に負担が掛かるという課題も残った。

第3章の課題に対して、第4章では、互いに励まし合う等、児童間で支援が可能な部分に関しては、対応策を児童間で機能するようにデザインし、個別の対応策を減らすことで、対応策の準備に掛かる負担の軽減を図った。その結果、ARCS 動機づけモデルを活用し、児童抱える自信に関する課題に対して、児童間で機能する対応策を組み込むことで、児童の学習に関する自信を向上させることができた。ただし、対応策デザインが不十分であった「フィードバックを適切なタイミングで行うこと」と『真似すること』と『参考にすること』の線引きを行うことについては、対応策を有効に機能させることが出来なかった。今後は、適切なタイミングでフィードバックが与えられるように改善を行う必要がある点と、教師が児童の良いところを一般化する役割を担う必要がある点が課題となった。

以上の結果及び考察から、今後、ARCS 動機づけモデルを活用し、小学校授業において、「意欲」や「自信」の向上を意図する際、小学校の授業デザインに生かされる示唆としては、ARCS 動機づけモデルを活用することで、児童の実態に即した動機づけを組み込んだ授業デザインができること、そして、対応策を焦点化し、児童間で機能するようにデザインすることで、動機づけに関わる授業デザインのコストを軽減できるということである。

また、本報告書では、教師が対応策を用意することで、児童の自信に働きかけているが、今後は対応策の意図を説明し、児童が自ら対応策を打つことができるように指導することも必要であると考えられる。本報告書を通して学んだことを出発点として、児童が自分自身で「自信」を生み出すことができるような授業デザインや学級づくりについても探究していきたい。